アジアの中の日本語研究 ―― 序にかえて ――

日本語研究はアジアを基盤になされなければならない。中国大陸はアジアにおける文化の震源地として機能してきた。それは18世紀まで続いた。日本歴史2,000年のうち、近代以降わずか200～300年を除き、古代から永きにわたり、中国大陸の影響をこうむったことになる。中国大陸を視野に入れない日本語研究は浅薄なものとなるだろう。

とはいえ、永い歴史のゆえに、中国大陸そのものが変化の波にさらされている。黄河流域における漢民族の興隆、そしてさらに揚子江を越えて膨張していった、漢民族の文化そのものがこれらの歴史的過程の中で変容していったことを考えないわけにいかない。漢民族の興隆以前の中国大陸は、無数の差異のある文化をもった弱小民族が分散していたにちがいない。これら弱小民族は漢民族の膨張の中に埋没していったにちがいない。

中国大陸の周辺に残るいわゆる少数民族は、これら弱小部族の残存とみられる。かつては揚子江のほとりで生活を営んでいた人々がしだいに周辺に押しやられ、今では中国大陸の周辺部に部族の命脈を保っているのである。これら中国大陸の中央部における変容は、近隣のモンゴル・チベット・ベトナム・日本列島・朝鮮半島を考えるとき、基盤となるものである。

これまでの日本語研究をみると、あまりにも日本列島内、なかんずく、その中央にこだわり過ぎた感はぬぐえない。その結果、日本語研究の中で、アジアという視点を欠落させてしまったように思われる。これからの日本語研究は、日本列島の周辺はもちろん中央語ばかりでなく、近隣のアジア諸国を視野に入れて進めなければならないと考えている。国際化が進む中で、このような視点からの日本語研究がますます要請されてくるであろう。

中国や韓国からの留学生が多くなった。これからは近隣の諸言語との比較研究や対照研究が増えていくはずである。日本語教育は、これらの研究が進む中で築かれていかねばならない。

われわれの大学は、目黒から八王子へ移転した。新校舎になって新しい気風が芽ばえたようでもある。この日本語研究も新しく発展していってほしいものである。

小泉保先生を集中講義にお招きし、これを縁にして先生の玉稿をいただくことができ、巻頭を飾ることができた。感謝を申し上げたい。

1991年9月　　中　本　正　智